古靈寶經に見える經典觀

――「元始舊經」の經典觀と「十部妙經」の經典觀の比較を中心に――

林　佳　惠

一、はじめに

靈寶經の研究に於いて最も根本的な問いの一つは、靈寶經とはどのような意味を持つ經典として編まれたのか、ということである。それは、靈寶經の起源を知るための問いでもある。周知のように、靈寶經と呼ばれる經典は、東晉末頃から中國江南地域で作られ始め、劉宋中葉に至り、道士陸修靜（四〇六～四七七）によって分類整理され體系化された。[1] 陸修靜が自身で分類整理した靈寶經典を著錄して作成した靈寶經の目錄[2]については、一九七四年の大淵忍爾氏の論文[3]で紹介された敦煌寫本ペリオ二八六一の二とペリオ二二五六[4]に見える靈寶經の目錄が、その內容を保存しているとされる。本稿では、この敦煌文書中の靈寶經の目錄を敦煌本「靈寶經目錄」、そこに著錄される靈寶經を古靈寶經と呼ぶ。

陸修靜がどのような靈寶經觀を持って、靈寶經の分類整理を行ったかは、元嘉十四年（四三七）の著述である「靈寶經目序」（『雲笈七籤』（HY一〇二六）第四卷所收。以下、「目序」と略す）の中の靈寶經の神話傳承的な「歷史」の記述から知ることができる。そこで開陳される陸修靜の靈寶經觀は、「元始舊經」を靈寶經の體系の中心に置くものであるが、つとに諸先學によって指摘されて

いるように、そこには敦煌本「靈寶經目錄」著錄經典の內容から發想したと思われる、元始天尊が教說し、それを敷演して作られたという「元始舊經」の設定が見え、その靈寶經觀は、陸修靜が古靈寶經に見える經典觀を繼承し、それを統合したもののようにも見える。(5) しかし、當然のことながら、陸修靜の靈寶經觀は、經典を分類整理する立場から構築された、言うなれば靈寶經典の體系化の理論を示すものであって、ある部分では古靈寶經に內在する經典觀を繼承しつつも、靈寶經典の作者が自ら編んだ經典に對して抱いていた經典觀を單に統合し繼承したものではないと考える。古靈寶經に內在する靈寶經觀とは、その經典作者が經典に持たせた價値、目的、意義の反映であり、そこに冒頭に擧げた靈寶經研究の根本的な問いの答えを得る手がかりがあるのではないか。本稿では、陸修靜が考える「元始舊經」に示された經典觀と、古靈寶經中に散見する「十部妙經」に窺える經典觀の比較を通して、古靈寶經中に內在する經典觀、卽ち、經典の作者が靈寶經をどの樣な意味を待つ經典として考えていたのかを考察する。

筆者はこれまで行ってきた古靈寶經についての考察から、古靈寶經が從來考えられてきたような新舊二系統から構成される經典羣ではなく、より多元的な樣相を示す經典羣であると考えており、(6) この「十部妙經」が示す經典觀は、古靈寶經全體に涉る一元的な經典觀ではなく、古靈寶經の中の一部の經典に窺える經典觀ということになる。しかし、「十部妙經」に窺える經典觀は、少なくとも、古靈寶經の中にはそのような經典觀のもとで編纂された經典が存在していたことを示すものであり、そうした一部の古靈寶經の有する經典觀について考察することによっても、陸修靜が考える「元始舊經」の經典觀の特色について、より明確にできるものと考える。

なお、本稿では、敦煌本「靈寶經目錄」に「元始舊經」として著錄されている經典と、陸修靜の經典分類のカテゴリーを示す槪念としての「元始舊經」とを區別して、後者については、〝陸修靜の考える「元始舊經」〟という言い方を用いる。

二、陸修靜の考える「元始舊經」の設定

「十部妙經」について考察する前に、陸修靜の考える「元始舊經」がどのような經典として設定されているかを確認しておきたい。卽ち、「目序」を見ると、

資料1：陸修靜『靈寶經目序』（『雲笈七籤』卷四）、（四a～五a）：

夫靈寶之文、始於龍漢、龍漢之前、莫之追記。延康長劫、混沌無期、道之隱淪、寶經不彰。赤明革運、靈文興焉。（中略）上皇元年、元始下敎、大法流行。衆聖演暢、修集雜要、以備十部三十六帙、引導後學、救度天人。上皇之後、六天運行、衆聖幽昇、經還大羅。自茲以來、廻絶元法。（中略）龍精之後、續祚之君、罷除僞主、退翦逆民、衆道勢訖。此經當行。推數考實、莫不信然。期運既至、大法方隆。但經始興、未盡顯行。十部舊目、出者三分（夫れ靈寶の文は、龍漢に始まり、龍漢の前、之を追記する莫し。延康は長劫にして、混沌として期無く、道は之れ隱淪し、寶經彰らかならず。赤明に運を革め、靈文焉に興る。（中略）上皇元年、元始敎を下し、大法流行す。衆聖演暢し、雜要を修集し、以て十部三十六帙を備へ、後學を引導し、天人を救度す。上皇の後、六天運行し、衆聖幽昇し、經は大羅に還る。茲より以來、元法を廻絶す。（中略）龍精の後、續祚の君、僞主を罷除し、逆民を退翦し、衆道の勢ひ訖はる。此の經當に行ふべし。數を推し實を考ふるに、信然ならざるは莫し。期運既に至り、大法方に隆んならんとす。但だ經始めて興り、未だ盡くは顯行せず。十部舊目、出づる者は三分なり）、

とあり、「目序」のこのような靈寶經の神話傳承的な「歷史」の內容から、陸修靜は「元始舊經」を次のように設定していたことが判る。

①元始天尊が「靈寶之文」を敷演し、撰作された經典である。

②六天の支配が始まると地上を去って大羅天に還り、そこに祕藏される。

③劉宋王朝の樹立に際して、その瑞兆として再び地上に出現し始める。

設定の②③については、以下に示す『太上靈寶諸天內音自然玉字』（HY九七、以下、『內音玉字』と略す）巻四に見える內容から、陸修靜はその着想を得た可能性が考えられる。[7] 卽ち、

資料2：『內音玉字』巻四（二四a～b）：

今粗解天書五合文義、其道足開度天人拔諸苦根、大法開張、澤被十方、今生來世男女善人、當得此恩。然按元陽玉匱、九天推數運行、靈關周廻、三十二天一交、僞道出行、萬姓心懷詐共崇奉、此文當還大羅之上、七寶宮中。三五周竟、萬道勢訖、大聖隆興、下世度人、誅罷僞座、退翦逆民、道德興隆、天下太平、國主享祚、十方寧焉。眞經輔世、善瑞日生。（中略）當有青帝、九種仙人乘九色之龍、出遊泰山、齋此眞經、以掃不詳、眞經下世（今天書五合の文の義を粗解するに、其の道天人を開度し諸苦根を拔するに足り、大法開張し、澤は十方に被り、今生來世の男女善人、當に此の恩を得るべし。然して元陽玉匱に按ずるに、九天數を推し運行し、靈關周く廻り、三十二天一たび交われば、僞道出で行なはれ、萬姓心に詐りを懷き共に崇奉し、此の文當に大羅の上、七寶宮中に還らんとす。三五周り竟り、萬道の勢ひ訖り、大聖隆興し、世に下りて人を度し、僞座を誅罷し、逆民を退翦せば、道德興隆し、天下太平となり、國主は祚ひを享け、十方寧んずるなり。眞經は世を輔け、善瑞日丶生ず。（中略）當に青帝、九種仙人有りて九色の龍に乘り、泰山を出遊し、此の眞經を齋し、以て不詳を掃はんとし、眞經世に下るべし）、

とあり、『內音玉字』では「僞道出行」云々と表現される世の亂れを機に、天文である「天書五合文」[8]は大羅天に還るが、太平の世が訪れると地上に再び出現することが說かれる。『目序』では、この「天書五合文」の設定を取り込むことで、「元始舊經」を劉宋の瑞兆である「天書」とし、それにより、陸修靜が太平の世の具現

（救世の實現）と考える劉宋建國を象徴するものとして、「元始舊經」の存在を意味づけていると見ることができる。ところで、これまで古靈寶經中に散見する「十部妙經」は、陸修靜の考える「元始舊經」の設定①との類似から、「元始舊經」と同義語のように考えられてきた。しかし、實際に古靈寶經の現行本中の「十部妙經」を見ると、①の設定が共通する以外に、陸修靜の考える「元始舊經」とは異なる設定がされている。[9] そこで次に、具體的に「十部妙經」がどのようなものとして設定されているのかについて見て行きたい。

三、古靈寶經に見える「十部妙經」

（一）「十部妙經」の語が見える古靈寶經典

「十部妙經」は、敦煌本「靈寶經目錄」著錄の「元始舊經」に分類された經典の一部に見える語であり、現存するテキストで「十部妙經」に言及する經典は以下の五件である。

（1）『元始五老赤書玉篇眞文天書經』（HY二二、以下『天書經』と略す）

（2）『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』（HY三五二、以下『玉訣妙經』と略す）

（3）『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明眞科』（HY一四〇〇、以下『九幽玉匱明眞科』と略す）

（4）『太上諸天靈書度命妙經』（HY二三、以下『度命妙經』と略す）

（5）『三元戒品』（※これのみ敦煌本「靈寶經目錄」卷目名）

この內、（3）の『九幽玉匱明眞科』は、卷末の法信規定中の四條項に「靈寶眞文十部妙經」と記述するのみで、「十部妙經」についての具體的な言及はない。（5）の『三元戒品』の現行本の『太上大道三元品誡謝罪上法』（HY四一七）、『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』（HY四五六）には「十部妙經」の語は見えないが、『元始無量度人上品妙經四註』（HY八七、以下『度人經』四註本と略す）卷二の嚴東注の中の『三元戒品』の要略部分にその語が見えるので、それを『三元戒品』の「十部妙

經」に言及する部分として見ることができる。ここでは、(3)の『九幽玉匱明眞科』を除く四件の文獻中の「十部妙經」に言及する部分から、これらの靈寶經典の中で「十部妙經」がどのようなものとして設定されているかを分析し、そこから窺えるそれらの古靈寶經典に內在する靈寶經觀について考察する。

(二) 陸修靜の考える「元始舊經」の設定と類似する「十部妙經」の設定

ここでは先ず、陸修靜の考える「元始舊經」の設定①と同様の設定が、「十部妙經」にも見えることを確認しておきたい。

資料3：『度命妙經』

(A) 汝見眞文在光中不。此文以龍漢之年、出於此土。時與高上大聖玉帝撰十部妙經、出法度人（汝は眞文光中に在るを見るや不や。此の文龍漢の年を以て、此の土に出づ。時に高上大聖玉帝と與に十部妙經を撰し、法を出だし人を度す）。(一b)

(B) 天尊言曰、我昔龍漢之年、與元始天王、高上玉帝、同於此土、遇靈寶眞文出於浮羅空山之上。鳳凰孔雀、金翅羣鳥、飛翔其巔。須臾之頃、忽有五色光明、洞照一土、幽隱竝見。我於空山之上、演出眞文、撰十部妙經、始於此土、出法度人、欲令法音流化後生、其法開張（天尊言ひて曰く、我は昔龍漢の年、元始天王、高上玉帝と與に、此の土に同まり、靈寶眞文の浮羅空山の上に出づるに遇ふ。鳳凰孔雀、金翅羣鳥、其の巔を飛翔す。須臾の頃、忽ち五色の光明有り、一土を洞き照らし、幽隱せるもの竝びに見る。我は空山の上に於いて、眞文を演出し、十部妙經を撰し、此の土より始めて、法を出だし人を度し、法音をして後生を流化し、其の法をして開張せしめんと欲す）。(七a～b)

以上の『度命妙經』の言及を見ると「十部妙經」は元始天尊が「靈寶眞文」を敷演し撰作されたものであるとされており、これは確かに陸修靜の考える「元始舊經」と同様の設定である。次に『三元戒品』について、『度

人經』四註本の嚴東注に見える『三元戒品』（嚴東注では『三元品戒』となっている）の要略部分を見てみたい。

資料4：『三元戒品』：道藏本『度人經』四註本卷二、嚴東注

其事自具出三元品戒中、今略擧一隅。昔龍漢之年、玉字始出、日月始明。天地亦分、衆眞列位。元始出法度人、說經十遍、周回十方、度人无量之數。元始因撰作十部妙經、以紫筆書著空青之林。衆聖所崇、爲經之祖宗。故曰、上品妙首也（其の事　三元品戒の中に具さに出づるに自り、今一隅を略擧す。昔龍漢の年、玉字始めて出で、日月始めて明らかなり。天地も亦た分かれ、衆眞は位を列ぬ。元始は法を出だし人を度し、經を說くこと十遍、十方を周回し、人を度すること无量の數なり。元始因りて十部妙經を撰作し、紫筆を以て空靑の林に書き著す。衆聖の崇ぶ所、經の祖宗爲り。故に曰く、上品妙首なり、と）。（四a～b）

ここでは眞文は「玉字」と表現されているが、[10]これを元始天尊が教說し、「十部妙經」が撰作されたことが見える。また、『天書經』卷下にも、同樣の設定が見える。卽ち、

資料5：道藏本『天書經』卷下

元始自然赤書玉篇眞文、開明之後、各付一文、安鎭五嶽。舊本封於玄都紫微宮、衆眞侍衞、置立玄科、有俯仰之儀。至五劫周末、乃傳太上大道君、高上大聖衆、諸天至眞、奉修靈文、敷演玄義、論解曲逮、有十部妙經三十六卷。玉訣二卷、以立要用。※悉封紫微上宮（元始自然赤書玉篇眞文、開明の後、各〻一文を付し、五嶽を安鎭す。舊本は玄都紫微宮に封じ、衆眞侍衞し、玄科を置立し、俯仰の儀有り。五劫の周の末に至り、乃ち太上大道君、高上大聖衆、諸天至眞に傳へ、靈文を奉修し、玄義を敷演し、曲逮を論解して、十部妙經三十六卷有り。玉訣二卷、以て要用を立つ。悉く紫微上宮に封ず）、（十二a～b）

とあり、『度命妙經』や『三元戒品』と同樣、「元始自然

赤書玉篇眞文」の玄義が敷演されて「十部妙經」が作られたことが見える。それ故、「十部妙經」に言及する古靈寶經では共通して、「十部妙經」は眞文を敷演して撰作されたものであるという基本設定がされていたと考えることができる。おそらく陸修靜は、これらの經典に見える「十部妙經」の設定から着想して、「元始舊經」の設定①を考えたと推察される。なお、※を附けた「悉封紫微上宮」の部分は、陸修靜の考える「元始舊經」の設定②に通じる內容であるが、これはこの後に考察する「十部妙經」の設定に照らして、『天書經』に元からあったとするには愼重を要する記述である爲、これについては改めて本稿三の(四)に述べる。

(三)「十部妙經」の具體的な內容

「十部妙經」が「靈寶眞文」を敷演して撰作されたものであるとして、古靈寶經の中で、「十部妙經」の具體的な內容については、どのように考えられていたのであろうか。それを知る手がかりとして、『玉訣妙經』卷上や『度命妙經』の「十部妙經」に關わる記述部分が擧げられる。先ず、『玉訣妙經』について見てみると、次のような記述がある。

資料6：『玉訣妙經』卷上

(C) 道告龍賜、吾於七百萬劫、奉修靈寶。立願布施、持戒執齋、勤苦不退、展轉生死、忍辱精進、斷除異念、空受無想、積感玄寂、得作衆聖。道尊常用慈念、欲令廣度衆生、是男是女、好願至人、咸使得見靈寶妙法。爾有善心、來歸法門、由爾前生萬劫已奉至眞。功滿德足、致生道世、値遇法興。今當爲爾解說凝滯、十部妙經使爾救度十方諸天人民(道　龍賜に告ぐ、吾は七百萬劫に於いて、靈寶を奉修す。立願し布施し、持戒し執齋し、勤苦して退かず、生死を展轉し、忍辱精進し、異念を斷除し、無想を空受し、玄寂を積感し、衆聖と作るを得たり。道尊は常に慈念を用って、廣く衆生、是男是女、好願の至人を度さしめ、咸く靈寶の妙法を見るを得しめんと欲す。爾(なんぢ)に善心有り、來たりて法門に歸するは、爾の前

生萬劫に已に至眞を奉ずるに由る。功滿ち德足り、道世に生ずるを致し、法の興るに値遇す。今當に爾が爲に凝滯を解說し、十部妙經もて爾をして十方諸天の人民を救度せしめんとす）。（一a～b）

（D）吾受元始眞文舊經、說經度世萬劫、當還无上宛利天。過世後、五濁之中運命不逮、是男是女不見明教、常處惡道生壽無機、而憂惱自嬰多受枉橫、自生自死輪轉五道、墮於三途八難之中、殃對相尋無有極已、生死分離無有豪賤。實爲痛心。今解說諸要、以度可度。汝好正意、諦受吾言。於是注訣。龍賜稽首、伏受教旨（吾元始眞文舊經を受け、經を說き世を度すこと萬劫、當に无上宛利天に還らんとす。過世の後、五濁の中運命逮ばず、是なる男是なる女も明教に見えず、常に惡道に處り生壽に機無く、而して憂惱自ら嬰り多く枉橫を受け、自ら生じ自ら死し五道を輪轉し、三途八難の中に墮し、殃對相ひ尋ね極り已むこと有る無く、生死分離は豪賤有る無し。實に爲に心を痛む。今諸要を解說し、以て度すべきを度す。汝好く意を正し、吾が言を諦受せよ、と。是に於いて注訣す。龍賜稽首し、伏して教旨を受く）。（二a～b）

（C）の部分では、「法戒」の傳授を求めた學士王龍賜に對して、高位の神格である「道」は「十部妙經」をもって王龍賜に衆生を救濟させようと言い、（D）の箇所では、「元始眞文舊經」の「諸要」が解說され、同經典二丁bのその後に續く部分で衆生救濟の爲に王龍賜に「靈寶大戒」が傳授されている。

『度命妙經』では「十部妙經」に關して、以下のような記述が見える。

資料7：『度命妙經』

（E）吾過去後、眞文隱藏、運度當促、五濁躁競、萬惡竝至。感念來生、生在其中、甘心履罪、展轉五道、長苦八難、更相殘害、憂惱切身。不見經法、不遭聖文、任命生死。甚可哀傷。深愍此輩不知宿命、殃對相尋、所從而來。今當爲諸來生、說十部妙經、以度天人。汝可勤爲用心。正意諦受、勿忘是言（吾

過去せし後、眞文隠藏し、運度當に促り、五濁躁競し、萬惡竝び至るべし。來生を感念するに、生じて其の中に在り、甘心して罪を履み、五道を展轉し、長く八難に苦しみ、更も相ひ殘害し、憂惱身を切る。經法に見えず、聖文に遭はず、命を生死に任す。甚だ哀み傷むべし。此の輩の宿命あり、殃對相ひ尋ね、從りて來たる所を知らざるを深く愍む。今當に諸、の來生が爲に、十部妙經を說き、以て天人を度すべし。汝勤めて爲に心を用ふべし。意を正して諦受し、是の言を忘るる勿かれ)。(二a)

(F) 吾過去後、眞經隠藏、天運轉促、國當破壞。來生塗炭、不遇經教、流曳五苦八難之中、男女夭命、痛毒可言。今故說是經(吾過去せし後、眞經隠藏し、天運轉た促り、國當に破壞すべし。來生塗炭し、經教に遇わず、五苦八難の中を流曳し、男女夭命す、痛毒言う可し。今故に是の經を說く)。(七b)

(G) (天尊言曰) …我封天文於此觀中、故名之爲洞靈之觀。…(中略)…我過去後、此觀經文當還鬱單無量天中。天氣當促、萬災夭命殘傷天人、來生塗炭、不及經教、流曳五苦、非可忍見。今故說是經(我天文を此の觀中に封ず、故に之を名づけて洞靈の觀と爲す。…(中略)…我過去せし後、此の觀の經文當に鬱單無量天中に還るべし。天氣當に促り、萬災夭命天人を殘傷せんとし、來生塗炭し、經教及ばず、五苦を流曳し、見るを忍ぶ可きに非ず。今故に是の經を說く)。(九a~b)

(H) 吾過去後、經道當還三界之上、大羅天中。…(中略)…、不忍見來世頑癡可哀。故遺明戒(吾過去せし後、經道當に三界の上、大羅天中に還るべし。…(中略)…、來世の頑癡にして哀れむ可きを見るに忍びず。故に明戒を遺す)。(十九a~b)

『度命妙經』では、(E)の傍線部分に「爲諸來生、說十部妙經、以度天人」とあり、「十部妙經」を說き、これを用いて衆生を救濟することが說かれ、これと同樣の內容が(F)、(G)にも窺える。また(H)では、來世の衆生救濟の爲に「明戒」と稱される戒を遺すことが見える。

これらから、『度命妙經』では「十部妙經」は衆生救濟の爲に說かれるものであり、それには具體的な內容として戒が含まれることが考えられる。[11]

「十部妙經」に言及する經典を見ると、『玉訣妙經』は、經題に示されているように經典自體が眞文の玉訣や、眞文の要訣の一つである「靈寶大戒」と總稱される戒、眞文と關わる科法、卽ち儀禮の方法の說明である「元始靈寶五帝醮祭招眞玉訣」等で構成されている。『天書經』は、眞文の他、眞文由來の眞符や、それらの解說、及びそれらを用いた科法に關する內容構成になっている。『度命妙經』も眞文の緣起やその效驗等の解說や眞文に由來する玉章等で構成されている。それらは、眞文を敷演した內容であると言える。これらのことから推して、古靈寶經で考えられていた「十部妙經」とは、具體的には內容に眞文の要訣や科戒を含んだ、「十部妙經」に言及する經典自體を指していると解釋できる。

(四)「過去」說と關わる「十部妙經」の設定

古靈寶經典中に見える「十部妙經」の設定では、陸修靜の考える「元始舊經」の設定②③と大きく異なる設定が、經典中に見える所謂「過去」說とのかかわりから見出せる。古靈寶經典中の「過去」說については先學の優れた研究[12]があるので、ここでは簡單な說明に留めるが、この「過去」說とは、最高位の尊神（元始天尊、「道」）が地上を去るという考えである。「十部妙經」に言及する靈寶經典では、この「過去」說に關わる記述の中で「十部妙經」に對して、陸修靜の考える「元始舊經」とは異なる設定がされている。『度命妙經』の資料7に示した部分を見ると、元始天尊が地上を去るのに伴い、眞文（眞經）も地上から失われ、天界に還ることが說かれ、その爲に地上は「五濁躁競、萬惡竝至」と表現される狀態と化すことが豫言され、また、この地上の來世の人々を含めた衆生救濟の爲に「十部妙經」が說かれ、戒が地上に遺される。先に見た資料6の『玉訣妙經』卷上でも(D)の傍線部分から窺えるのは、「元始眞文舊經」が「道」と共に天界に還ってしまい、「明敎」に出會えない

「過去」後の衆生の救済の爲に、王龍賜に「十部妙經」が解説され、その後に「靈寶大戒」が傳授されるに至る狀況である。これらから、「過去」説では「眞文」と「十部妙經」に對してそれぞれ、次のような設定がされていることが看取される。それは卽ち、

①「眞文（天文）」は、最高位の尊神と共に地上を去り、天界に還るものである。

②「十部妙經」は、尊神「過去」後の五濁の中の衆生救濟の爲に地上に遺されるものであり、地上における衆生救濟の象徵であり、その手段としての要訣・科戒である。

という設定である。ここで天界に還るのは眞文である。例えば、『天書經』には「五老玉篇」卽ち、「元始自然赤書玉篇眞文」が本來、天界の紫微宮七寶玄臺に祕藏されていたと述べられている。以下に、その部分を見ると、次のような記述がある。

資料８：『天書經』

（J）五老玉篇、皆空洞自然之書、祕於九天靈都紫微宮七寶玄臺（五老玉篇、皆空洞自然の書、九天靈都紫微宮七寶玄臺に祕す）…（後略）。（卷上一ａ）

（K）元始自然赤書玉篇眞文、開明之後、各附一文安鎭五嶽。舊本封於玄都紫微宮（元始自然赤書玉篇眞文、開明の後、各、一文を附して五嶽を安鎭す。舊本は玄都紫微宮に封ず）。（卷下十二ａ）

この「元始自然赤書玉篇眞文」が太上大道君らに紫微宮で傳授されたことが、同じく『天書經』卷上の七丁ａにみえる。卽ち、

（L）（元始天尊）…登命五老上眞、披九光八色之薀、雲錦之囊、出元始赤書玉篇眞文靈寶上經、以付太道太道君、高上玉帝、十方至眞、諸天大聖、妙行眞人（登ちに五老上眞に命じ、九光八色の薀、雲錦の囊を披き、元始赤書玉篇眞文靈寶上經を出し、以て太道太道君、高上玉帝、十方至眞、諸天大聖、妙行眞人に付す）、…（後略）、

とあることから、『天書經』の解説・補足をする經典であると考えられる『玉訣妙經』卷上の、資料６の（D）に

見える「元始眞文舊經」はこの「元始自然赤書玉篇眞文」を指し、『玉訣妙經』も本來、眞文が天界の紫微宮に祕藏されていたという考えを根底に持つと考えられる。このような「過去」説に見える眞文の天界還上という設定には、天書である眞文が、本來在った場所に還る、という意味が含まれていると見ることもできよう。天界に還る眞文に對し、「十部妙經」は地上から失われる眞文に代わって、尊神過去後の地上で、「五濁の中」に置かれる衆生を救濟する爲に地上に遺されるものとして設定されている。つまるところ、地上にあって衆生を救濟することが「十部妙經」の存在意義であり、これは、「十部妙經」に該當する地上に存在する現實の靈寶經典に、その作者が與えた經典の存在意義であると言える。[13] また、それ故、先に資料5で※印を附けて示した、「十部妙經」の天界祕藏を述べる『天書經』卷下の「悉封紫微上宮」の記述については、『天書經』を補足解説するとされる『玉訣妙經』中に示された「十部妙經」の存在意義と矛盾することから考えて、後世の加筆・改訂が疑われる。[14]

陸修靜の考える「元始舊經」と古靈寶經中に見える「十部妙經」とは、同じく眞文を敷演し、撰作された經典であるという基本設定ではあるが、陸修靜の考える「元始舊經」が、天界から降る太平の世の具現の象徵とされているのに對し、古靈寶經中の「十部妙經」は、地上を去る尊神によって地上に遺された、地上における衆生救濟の象徵とされている。陸修靜の考える「元始舊經」と、古靈寶經中の「十部妙經」との、このような經典としての存在意義の大きな相違は、經典觀という點から見て、陸修靜の考える「元始舊經」と、「十部妙經」が本來、同義語として扱い得ないことを示していると言えよう。ところで、「十部妙經」に言及する古靈寶經は、いずれも敦煌本「靈寶經目錄」で「元始舊經」に分類されている。卽ち、陸修靜が「元始舊經」に分類した古靈寶經の中に、陸修靜の考える「元始舊經」の示す經典觀とは異なる經典觀を有する經典が、「元始舊經」として含まれているということになる。このことからも、陸修靜の考える「元始舊經」は、陸修靜の靈寶經體系化の理

論としての靈寶經觀に基づく經典の分類概念であり、古靈寶經本來の在り様を反映するものではないことが指摘できる。

四、まとめ

これまでの考察から、古靈寶經に見える「十部妙經」の設定と、そこに窺える經典觀は以下のようにまとめることができる。

①「十部妙經」は元始天尊が「靈寶眞文」を敷演し、撰作された經典である。（この設定は、靈寶經典の神聖性・正統性を示すものと言える。）

②「十部妙經」は、具體的內容としては眞文の要訣・科戒の類を指す。經典の內容構成を見ると、「十部妙經」に言及する經典も「十部妙經」の內容に該當する要訣・科戒の類を含んでいる。卽ち、「十部妙經」に言及する經典自體が、「十部妙經」として設定されていると言える。

③「十部妙經」は尊神が去った後の五濁の世で、衆生を救濟する爲に地上に遺された經典である。この設定は、尊神過去後の世界に、經典が作成された現實の時代を重ね合わせ、元始天尊も、空中に光り輝き靈妙な力を發する眞文も存在しない現實の世界に在って、樣々な苦しみの中にいる衆生を救濟する爲にかつて尊い神々が地上に遺した經典として、靈寶經を意味づけている。また、具體的には要訣・科戒が救濟の方法として考えられている。

少なくとも一部の古靈寶經典にこのような靈寶經觀が內在するということは、古靈寶經が作られ始めたとされる東晉末の社會情勢と照し合せて考えれば、十分納得がいくであろう。

ところで、古靈寶經の中には、現行本を見る限り、これまで考察した「十部妙經」に見える經典觀とは異なる考えを示す經典も含まれている。例えば『太上玄一眞人說妙通轉神入定經』（HY三四七）では、眞人が葛仙公に對して、「吾受太上命、使授子勸誡妙經、演法說教。事

妙極此。其文祕於太上紫微宮中（吾　太上の命を受け、子に勸誡妙經を授け、法を演べ教を說かしむ。事の妙此に極まれり。其の文　太上紫微宮中に祕す）」云々（八b）と述べていて、その經典自體を天界祕藏の經典とする考えが見える。また、神聖な文字から成る「天書」という考えに重きを置かない、『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』（HY三二五）のような經典もあり、[15] これらの中に看取される經典觀は、「十部妙經」の設定に窺える靈寶經觀とは異なる。このように古靈寶經に內在する靈寶經觀が一元的でないことは、古靈寶經が東晉末から劉宋中葉にかけての變轉推移する時代の中で展開してきたことと無關係ではないであろう。但し、それについての考察は、今後の靈寶經研究の課題としたい。

註

（1）古靈寶經に關する主要な先行研究としては、陳國符氏「靈寶經考證」（『道藏源流考』新修訂版、北京中華書局、二〇一四年）、福井康順氏「靈寶經の研究」（『福井康順著作集』第2卷、法藏館、一九八七年）、大淵忍爾氏『道教とその經典』（創文社、一九九七年）、小林正美氏『六朝道教史研究』（創文社、一九九〇年）、神塚淑子氏『六朝道教思想の研究』（創文社、一九九九年）、同氏『道教經典の形成と佛教』（名古屋大學出版會、二〇一七年）、Bokenkamp, S. R. “Sources of The Ling-Pao Scriptures.” M.strickmann ed., *Tantric and Taoist studies in honour of R.A.stein*, Bruxelles; Institute Belge des Hautes Etudes Chinoises,vol. 2, 1983, pp. 434–486, 等が擧げられる。近年では、王承文氏『敦煌古靈寶經與晉唐道教』（北京中華書局、二〇〇二年）、同氏『漢唐道教儀式與古靈寶經研究』（中國科學出版社、二〇一七年）、謝世維氏『天界之文：魏晉南北朝靈寶經典研究』（臺灣商務印書館、二〇一〇年）、劉屹氏『敦煌道教與中古道教』（甘肅教育出版社、二〇一三年）、同氏『漢唐道教的歷史與文獻研究』（博揚文化、二〇一五年）、王皓月氏『析經求眞―陸修靜與靈寶經關係新探』（北京中華書局、二〇一七年）等の研究もある。古靈寶經に關する初期から現在に至るまでの先行研究については、劉屹氏が著書『六朝道教古靈寶經的歷史學研究』（上海古籍出版社、二〇一八年）の序編（一一～一六四頁）に詳しく紹介している。

（2）陸修靜は元嘉十四年と泰始七年（四七一）の二回、靈寶經の目錄を編纂したことが知られている。敦煌本「靈

寶經目錄」が陸修靜の二つの目錄のいずれに依るかと言う問題について、大淵忍爾氏は元嘉十四年の目錄であるとするが、小林正美氏、劉屹氏らは『笑道論』等の佛教側の文獻に見える陸修靜の靈寶經目錄に關する記述から、泰始七年の目錄であると推定している。各氏の見解については、以下を參照。大淵忍爾氏前揭書（一九九七年）第二章の七三～八八頁；小林正美氏前揭書（一九九〇年）第一篇第三章の一三九～一五二頁、劉屹氏前揭書（二〇一五年）三、古靈寶經的基礎研究：「敦煌本〝靈寶經目錄〟研究」（一四一～一七二頁）。本稿では、敦煌本「靈寶經目錄」は、泰始七年に敕命により編纂された『三洞經書目錄』の中の靈寶經典目錄の內容を傳えるものとして扱う。

(3) "On Ku Ling-Pao-Ching", in *Acta Asiatica* no. 27, tokyo, 1974, pp. 35–50。

(4) この二つの敦煌寫本については、大淵忍爾氏編『敦煌道經・圖錄篇』（福武書店、一九七九年）の七二五頁下段～七二七頁下段に寫眞圖版が收錄されている。

(5) 王承文氏は、陸修靜の「目序」は、「天文」信仰を神學の中核とする一種の典型的な古靈寶經の宇宙生成觀を根據としているとする。王承文氏前揭書（二〇〇二年）第六章第三節、同氏論文（佐野誠子氏譯）「靈寶「天文」信仰と古靈寶經教義の展開」（『中國宗教文獻研究』、臨川書店、二〇〇七年）、同氏論文「陸修靜道教信仰從天師道向靈寶經轉變論（上）」（『宗教學研究』二〇一四年第二期：後、前揭の『漢晉道教儀式與古靈寶經研究』第五章に收錄）參照。神塚淑子氏は、「目序」中の「開劫度人」說の說明が、古靈寶經の『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』（HY四五七）中の「開劫度人」說を繼承する內容であること、また、「目序」中の龍漢～上皇までの年號は、全て古靈寶經中に見えることを指摘する。神塚淑子氏論文「靈寶經における經典神聖化の論理―元始舊經の「開劫度人」說をめぐって」（『名古屋大學文學部論集・哲學51』二〇一一年：後、同氏前揭書（二〇一七年）第一篇第二章に收錄）。

(6) 本來、古靈寶經が、從來考えられてきたような敦煌本「靈寶經目錄」に見える「元始舊經」と「仙公新經」の新舊二系統の靈寶經典から構成される經典羣ではない、と考えられることについては、拙著『六朝江南道教の研究』（早稻田大學エウプラクシス叢書、早稻田大學出版部、二〇一九年）、第2篇第5章「十部妙經」と「元始舊經」、において論じている。

(7) 「目序」に示される陸修靜の靈寶經の神學が、『內音玉字』その他の古靈寶經中に見える「天文」信仰を基礎としていることについては、王承文氏がつとに指摘している。王氏の先行研究については、本稿の注(5)參照のこ

と。

(8)『內音玉字』では「天書」に關して、「天書玉字、凝飛玄之炁、以成靈文、合八會以成音、和五合而成章（天書玉字は、飛玄の炁を凝じ、以て靈文を成し、八會を合し以て音を成し、五合を和して章を成す）。」（卷一、一a）、「諸天內音自然玉字、諸天之中大梵隱語。結飛玄之炁、合和五方之音（諸天內音自然玉字は、諸天の中の大梵隱語。飛玄の炁を結び、合して五方の音を和す）」云々（卷三、六a）などと見える。

(9) これまで諸先學により、古靈寶經中に散見する「十部妙經」は、「元始舊經」と同義の用語であるように考えられてきた。小林正美氏前揭書（一九九〇年）第一篇第二章四、大淵忍爾氏前揭書（一九九七年）第二章四參照。これに對し筆者は、古靈寶經中の「十部妙經」が陸修靜の考える「元始舊經」と同義の用語ではないことを、前揭の拙著（二〇一九年）第2篇第5章で指摘している。

(10) 嚴東は『度人經』四註本卷三で「五篇」の語に「五篇、眞文、赤書玉字也」（七a）と注を附しており、ここから類推してこの「玉字」は「靈寶眞文」を指すと考えられる。

(11)「十部妙經」の具體的な內容が、眞文の要訣、科戒であることについては、前揭の拙著（二〇一九年）第2篇第5章で檢證している。また、神塚淑子氏の前揭論文（二〇一一年）では、「十部妙經」の具體的な內容としての言及はないが、「開劫度人」說に關する議論の中で、天尊の「過去」後に、戒が地上に遺されることが指摘されている。

(12) 神塚淑子氏前揭論文（二〇一一年）。

(13)「十部妙經」に示される、靈寶經が衆生救濟の爲に地上に遺された經典である、という經典觀は、現實に存在する靈寶經典の正統性を示すものでもあり、それは『度命妙經』全體の構成からも窺える。卽ち『度命妙經』では、五方國土で天尊が說く「過去」後の五濁の世は、經典中では上皇の時代の近い將來のこととして設定されている。『度命妙經』の中では、この上皇の時代にまだ天尊は「過去」していないが、この時代はその後に來る天尊「過去」後の世、卽ち、古靈寶經の編纂當時につながっている。そこから、現實に地上に存在する古靈寶經とは、かつて天尊が地上を去るに際して衆生救濟の爲に地上に遺した經典であるという、古靈寶經の作者が設定した靈寶經の起源とその神聖性、正統性の根據を見出すことができる。

(14)『天書經』卷下の「十部妙經」に關する記述部分に後世の加筆・改訂が疑われることについては、前揭の拙著（二〇一九年）第2篇第5章で言及している。

(15) 他の古靈寶經では、天眞による難解な天文の飜譯・解

説を重視するが、『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』では、「經」とは教えが説かれる以前に文字や符の形で存在しているものではなく、説かれた教えが「經」であるという、他の古靈寶經と異なる考えを示す。このことから劉屹氏は、この經典が古靈寶經の中でも遅い時期に成立した經典であると推定する。同氏「古靈寶經戒律思想的發展脈絡」(『敦煌寫本研究年報』第十號、二〇一六年)二一九～二三〇頁參照。

(本稿は、日本道教學會第六九回大會(二〇一八年、一一月一〇日、於廣島大學)で口頭發表した内容をあらためて論文にしたものである。)

執筆者紹介

吉野　晃　東京學藝大學名譽教授

林　佳惠　日本道教學會會員

井川義次　筑波大學人文社會系教授

二ノ宮聰　關西大學非常勤講師

酒井規史　慶應義塾大學商學部准教授

廣瀨直記　專修大學非常勤講師